

討論

痛む身体が問う植民地主義

石原 真衣

1. はじめに

本論では、グローバル・コンサーン研究所国際シンポジウム「コロニアリズムが奪う心身の健康」での討論（コメント）をもとに、現在の日本における被植民者の健康と植民地主義について、1. 植民地主義の忘却と傷、2. 植民地主義と知、3. それぞれの植民地主義の質的相違と交差について提起する。

同シンポジウムでは、鄭暎恵によってコロニアリズムとレイシズムが深くからみつく健康の不平等の起源とそこからの回復、蟻塚亮二からは東北という場所での複雑に絡みあう植民地主義、そしてマイケル・ドイルによってオーストラリア先住民のジェネレーショナルトラウマに関する実証的な研究および、先住民の健康の回復へ向けてのプロジェクトについて共有された。鄭は「コロニアリズムやレイシズムなど構造的暴力の歴史に潜んでいた、健康に関する不平等の根源を探究し、これらをなくしていくことで、グローバル・サウスをはじめ、あらゆる人の健康問題を解決」するためのアプローチである Decolonizing global health の重要性を強調した。植民地主義によって収奪されるものは、土地や名前や「人^{インサイダー}間¹」（鄭 2003:5）とみなされることで得る諸制度への権利のみではない。それは、旧植民地のように国家として解放・独立を得ても、あるいは先住民が文化的にはほぼ多数派に同化したかのようにみえようとも、傷が継承され続ける身体でもある。

2. 植民地主義の忘却と傷

日本において、これまでの植民地主義に関する議論や思考は、戦争や性暴力といった回路を通じて行われてきた。こうした回路からはずれるアイヌの状況は、不可視化されてきたともいえる。戦争と性暴力という普遍的暴力によって植民地主義を思考することは、植民者側の加害や責任をみえにくくする。ファッション・フェスティバル・フードなどの文化的消費がもたらす「コスメティック多文化主義」（モーリス＝スズキ 2002：155）の弊害とは、多数派の生活様式に変更を促さない——多数派に都合がよい——文化のみが受容されることで、あたかもマイノリティの権利回復を推進しているような妄想をもたらしてしまうことだった。戦争や性暴力をその背後にある植民地主義を前提に思考しないことは、コスメティック多文化主義の弊害と同様に、多数派の責任や加害の歴史を後景化させてしまうのではなかろうか。多数派が自らの責任や立ち位置を問わず、自らも被りうる暴力として旧植民地や沖縄での性暴力、そしてアメリカと日本と被植民者としての沖縄人という複雑な関係性をともなった沖縄戦について思考することは次に述べる植民地主義の忘却と同様に、今日植民地支配と直接的・間接的占領が続く北海道や沖縄の植民地主義的現実を覆い隠すものとして機能している。

2024年に刊行された『中学生から知りたいパレスチナのこと』では、岡真理、藤原辰史が「日本の植民地主義」についてパレスチナとの関連で述べている。日本の先住民問題から両氏の提

言を照らし返せば、植民地主義を過去のものとして扱ってしまっている点においてクリティカルな状況であるといわざるをえない。岡と藤原は「ガザを見たとき、日本は自国の植民地主義を想起できているか」と問いながら、「この日本という国がかつて中国で、朝鮮で、台湾で脱植民地化のために戦う者たちをすさまじい暴力で殲滅してきたという歴史的な事実」

(岡 2024:31-32)、また「東洋の小さな帝国であった日本も例外ではありません。かつて日本が中国東北部につくりあげた傀儡国家である満洲国（以下中略）」(藤原 2024:64)と述べ、その射程は 1945 年に独立した旧植民地に限定される(石原 2025)。岡と藤原の思考と記述は、アイヌや沖縄といった現在形で進行する日本の植民地主義的暴力を不可視化する。日本では、民族・人種における多数派が、自身の人種的特権性および利益享受性に無自覚に、知的営為を行ってきた²。はからずも暴力を隠ぺいし、結果として暴力に共謀さえしてしまう岡や藤原のような影響力の大きい知識人の振る舞いに、読者であるわれわれは気が付いているだろうか(同上)。

岡は、「日本の人文学に携わる者のマジョリティーにとって、ガザで今、起きていることが、自身の「関心領域」とあくまでも接続されないままであるならば、それは人文学者自身が自らの学問に死を宣告しているに等しい」とも述べた(岡 2024:34)。つづけて、「モニター画面の向こう」の「ジェノサイド」といった文章のあとに、「画面のこちらでは、まったく別の平和で安らかな生活」(同上:35)と述べられていることから、日本国内で現在も日本人による暴力の傷を受けている人々の存在はなかったことにして、パレスチナをマイノリティに、そして日本人を「マジョリティー」として書かれたのであるととらえよう(石原 2025)。「平和で安らかな生活」という言葉を、奪われた健康や依存症、自死、ヘイトクライム／ヘイトスピーチなどから耐えがたく不可分に暮らす日本の被植民者はどのように受け取るだろうか³。

パレスチナの現状を自らの知的営為に接続しない日本の人文学者に対して、岡と藤原らは「人文学の死」(岡ほか編 2024)を宣告した。しかし、日本で生きる被植民者であり人文学を行ってきた知識人は、植民地主義的暴力を問う「人文学」をずっと行ってきた。岡らによる死の宣告は、被植民者やマイノリティの出自や属性をもつ知識人を不可視化し、さらにそれはこうした知識人への「人文学者としての死」の宣告でもある(石原 2025)。鄭は、同シンポジウムで「ヘイトスピーチによって自ら死を選ぶほどの苦しみ、マイノリティ被害者にもたらされたとは理解されなかった、心の傷は、他者(ひと)からは見えない」と述べた。こうした「声を発することがなくても、まぎれもなくそこに存在する苦しみ」は、まさに、日本における植民地主義に関する認識の不在がもたらしているといえるだろう。

被植民者が被る痛みについて、同シンポジウムでの蟻塚とドイルの報告に注目したい。蟻塚の報告では、福島県浪江町津島地区における調査が 48.4%の人が PTSD に苦しんでいることを示し、これは日本の過去の災害の中で類を見ない高さだという。また、「重症の精神不調の者」は、県内避難者で 26.6%、県外避難者は 43.2%にのぼったこと、若者の自殺者数において福島県は全国一であることも示された。子どものころのトラウマ体験が、親や夫婦としての役割遂行能力を低下させている可能性があるという。災害と原発事故の被害者、先住民や被植民者が被った被害や傷は質的には異なるが、精神不調や親や夫婦としての役割遂行能力の低下などは、共通の課題だろう。

ドイルによる報告では、オーストラリア先住民は、健康や社会的な格差は、寿命、平均余命、

アボリジナルやトレス海峡諸島民の平均余命において、男女とも他のオーストラリア人より低いことが示された。また、オーストラリアの刑務所では、オーストラリアの人口の3.8%であるオーストラリア先住民が、オーストラリアの刑務所人口の35%を占めていること、比較としてカナダの先住民族は自国の人口の5%だが、連邦刑務所人口の32%を占めていることが提示された。

以上のような、健康上の課題を示す調査結果は極めて重要である。植民地主義による影響が世代を超えて子孫の生活を困難にすることを論理的に可視化できるからだ。日本の状況について少し整理しよう。日本が海外諸国に比べて、文化的多様性を把握するにあたり際立って困難であることは、国勢調査に民族・人種を把握する項目がひとつもないことに示されている。こうした状況の中で、アイヌや在日コリアン、被差別部落、などのマイノリティ集団の全体像は把握されていない。

2013年には、内閣官房アイヌ総合政策室が「次回平成27年国勢調査の調査事項として、アイヌ人口を追加していただきたい」と述べた要望に対して、総務省統計局は以下のように答えている。

「民族」について、回答の選択肢を設定するためには、それぞれの「民族」を一定の定義に基づいて分類する必要があるが、それぞれの「民族」を定義することはデリケートな（センシティブな）問題であり、また、我が国では、その分類のための定義は、公的には確立されていない。しかも、我が国に居住する者の多くが、自分自身がいずれの「民族」に属しているか把握できているとは言い難く、これを確認する手段も想定し難いことから、正しい記入を確保することができるかどうか懸念されるところである。なお、「アイヌ民族」に特化した調査事項を設けることは、結果利用が限定的になってしまうほか、差別的な調査である等の無用な批判を招くおそれがある（総務省統計局2013）。

国勢調査や人口統計での民族および人種に関する項目は、先住民政策主要地域である、カナダ、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、台湾、ノルウェー、スウェーデンにおいては全て備えられている。一方で日本では、民族に関する公的な定義が確立していない、かつ、日本に居住する人びとの多くがどの民族に所属するか把握されていないとする一方で、国勢調査に「アイヌ民族」に特化した調査事項が「無用な批判」を招くということで、民族の定義がなく市民全体が所属先がわからないのに、新たな項目の追加によって民族差別が起こりうるというダブルスタンダードを露呈している。

以上のように、統計によって全体像すら把握できず、一方で、民族・人種における多数派が「いずれの「民族」に属しているか把握できているとは言い難い」という、民族・人種による集団の相違がなかったことになっている社会では、そこで発生する困難も把握することが難しい。それぞれのマイノリティ集団には依存症、精神疾患、犯罪などの社会的困難が多くみられるが、それを刑務所や、病院などで把握することは今のところ困難である。マイノリティ集団における全体像や困難が十全に把握されない中で昨年「日本において複数の民族・人種にルーツがある人々についてのアンケート調査」が行われたことは画期的だった。調査結果では、メ

ンタルヘルスの不調の割合が全国調査に比べて 5.1 倍、自殺未遂の割合は全国調査に比べて 2.1 倍などが示されている（「日本において複数の民族・人種にルーツがある人々についてのアンケート調査」2024）。今後それぞれのマイノリティ集団において、このような調査・研究の進展が求められている。

2. 植民地主義と知

ドイルは、刑務所のプログラムにアルコール問題を含める必要があると述べた。こうした視点が「刑務所にいるアボリジナルおよびトレス海峡諸島民の若者のための、文化に根ざした社会的・感情的ウェルビーイング・プログラムの開発」として結実しているという。鄭が、「科学」や近代西洋男性中心の「医学知識」は、「普遍性」を装いながらも、コロニアリズムに加担してきたと述べたように、これまでマイノリティ集団の歴史的背景を踏まえた医療や福祉は行われてこなかった。例外的な事例として、同シンポジウムの登壇者であり、弘前、沖縄、福島、と植民地主義と傷の現場で医療を行ってきた蟻塚亮二の実践がある。今後、こうした医療実践が深化することが望まれるが、被植民者自身も、自分たちに内面化してしまった近代西洋男性中心主義／ドミナント社会中心主義による価値観や知の体系を批判的に再考し、自ら学びなおす必要がある。

その鍵とは、鄭が Decolonizing global health の説明として用いたフレーズ「コロニアリズムやレイシズムなど構造的暴力の歴史に潜んでいた、健康に関する不平等」を被った人びとの経験と身体にあるだろう。蟻塚は、「彼らがここまで歩いてこられた奇跡に感嘆し、リスペクトし、時には診察室でハイタッチしあう」という⁴。「奇跡とリスペクト」という言葉は、その背景にどれほどの苦しみと困難があるかが共有されているからだ。同シンポジウムが議論の中心としている「奪われた健康」とは、まさに、植民地主義とレイシズムによって収奪されたものだ。植民地主義の被害にあった一人ひとりの人間が解放され、健康を回復し、癒されるためには、その背景について社会全体で、さらに当事者同士でも共有される必要がある。

ドイルは、トランスジェネレーション・トラウマが継続的な問題であること、ある出来事を実際に体験していなくても、その出来事の影響を受けること、そして多くの場合、人々は自分が経験していることや、今現在の自分の生き方が、世代間トラウマの結果だとは思っていないということを述べた。私はこれまで、アイヌの曾祖母から私まで 4 世代の家族史とオートエスノグラフィを書いてきた（石原 2020）。自分たちの苦しみの背景にある植民地主義的な歴史性と自分たちの物語を奪還することで、適切な免責と引責が可能になる。それぞれの精神疾患、身体的困難、依存症、自死あるいはその未遂などのどこまでが社会的な要因に基づき、それぞれの個人によって回復されうる——責任を取りうる——範囲はどこまでなのか。そうしたことを見極めるためにも、植民地主義によってさまざまな被害を被った一人ひとりの人間が自分たちの歴史性を知ることは重要だ。損なわれた健康が、自分たちの物語を奪い返すことへつながり、そして癒しへとつながる可能性を拓く。

3. おわりに：それぞれの植民地主義の質的相違と交差

最後に、日本における植民地主義の質的相違について整理しよう。古代に遡る東北での植民

地主義は、1000年に渡り経済格差を生み出した。また在日コリアンをはじめとする旧植民地の出自を持ち日本に居住する人びとは、祖国が解放・独立したあとも植民地主義の被害を被っている。そして先住民であるアイヌや沖縄は、入植者植民地主義^{セトラーコロニアリズム}の結果として、土地を収奪あるいは間接的に占領され、入植者の文化に置き換えられている。アメリカ先住民は土地の1%を自治区として持っているが（石山 2020）、アイヌの場合その数字はゼロ%だ（石原、村上 2024: 200）。こうしたそれぞれの集団における植民地主義の違いを踏まえたうえでも、さらに共通点として残るのは、植民地主義による傷とそこからの回復という課題である。身体に刻まれた傷は、互いが連帯する糧になる。

同シンポジウムは、「解放され、健康を回復する」ことが目指された。一方で私は、植民地主義によって傷ついた身体こそが、決してこれまで承認や記憶されることがなかった植民地主義的暴力を可視化させるものだとおもう。「声を発することがなくても、まぎれもなくそこに存在する苦しみ」は、もしかしたら多くの場合、親から子どもへ伝えられなかったかもしれない。しかしわれわれ子孫の痛む身体には、語られなかった物語が克明に刻まれている。世代をいくつも超え、アイデンティティと文化を完全に喪失したとしてもなお、永遠に傷ついたままであるわれわれの身体こそ、植民地主義の忘却をくいとめるものになるのではなかろうか。

植民地主義と Justice をめぐる議論がようやくはじまった。日本の自画像と、これからの社会のあり方を問い直すユニークでエキサイティングなこの知的探究に、読者のひとりひとりが巻き込まれることを願いたい。

参考文献

- 石原真衣（2020）『〈沈黙〉の自伝的民族誌（オートエスノグラフィー） サイレント・アイヌの痛みと救済の物語』北海道大学出版会。
- 石原真衣（2025）「〈サイレントアイヌ〉とはなにか 植民地主義／レイシズムの忘却と痛む身体」『世界』3月号、岩波書店。
- 石原真衣、村上靖彦（2024）『アイヌがまなざす 痛みの声を聴くとき』岩波書店。
- 石山徳子（2020）『「犠牲区域」のアメリカ 核開発と先住民族』岩波書店。
- 岡真理、小山哲、藤原辰史（2024）『中学生から知りたいパレスチナのこと』ミシマ社（kindle版）。
- 総務省統計局（2013）平成27年国勢調査有識者会議（第2回）配布資料「平成27年国勢調査（簡易調査）で追加・廃止を検討する調査事項（案）」
<https://www.stat.go.jp/info/kenkyu/kokusei/yusiki27/pdf/02sy0503.pdf> 2025/1/31 閲覧
- 鄭暎恵（2003）『〈民が代〉斉唱 アイデンティティ・国民国家・ジェンダー』岩波書店。
- 複数ルーツの人々のアンケート調査委員会（2024）「日本において複数の民族・人種にルーツがある人々についてのアンケート調査」
<https://sites.google.com/view/surveyformixedinjapan> 2025/1/31 閲覧
- モーリス＝スズキ、テッサ（2002）『批判的想像力のためにーグローバル化時代の日本』平凡社。

石原 真衣 (いしはら まい)
(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)

-
- ¹ 鄭暎恵は、近代において「人々は、権力の等高線を“差別”として発見した。差別との闘いは、不本意に引かれた権力の等高線の引き直しを求める「政治」だった。誰までを「人^{インサイダー}間」の範疇に含め、誰を「非人間」として、排除〈他者化〉するかをめぐる政治」と述べている（鄭 2003:5）。
- ² 日本人の白人性（人種的特権性・利益享受性）に関する議論は（石原・村上 2024）を参照されたい。
- ³ 岡、藤原の論考をめぐる議論は、（石原 2025）で行っている。
- ⁴ 当日の報告では述べられなかったが、事前に共有いただいた発表原稿ではこのフレーズが記載されており、引用した。